

白山ふるさと文学賞

第十三回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

小学生1・2年 小説の部 最優秀賞

「こうすけとカーズケ」

東明小学校二年

前川まえかわ

友良ともよし

ぼくは、中村こうすけ。スポーツが大すきな小学校二年生。大きかふにすんでいて、おわらいとたこやきが大ききなんだ。友だちや小さい子がケガをしたときとかに声をかけてあげるような、やさしい男の子なんだ。

でも、友だちとはいつもなかよくできるのに、なぜかなかよくできない人がいる。それはぼくの五さいのおとうと、名前はたけし。ぼくはまい日おとうととケンカをしている。だって、たけしがいつもぼくにイヤなことをしてくるから。

「おとうとなんか大っきらいやわ。ゴミくずやねん。」  
とつぶやいたけど、ぜったいにおかあさんにしかられるから、ないしよにしておいてね。

「ミンミン」セミのなき声が聞こえるきせつになった。いよいよ今日から夏休み。

ぼくは大きかえきにお母さんと二人で行った。

「きつぷはちゃんとある？」

「のりかえに氣いつけやあ。」

「おじいちゃんおばあちゃんをいっばいよろこばせて来るんやで。」

お母さんがいっばい言ってきたけど、ぼくはぜんぶ大じょうぶとこたえて、大きな声で、

「行ってきまゝす。」

と言ってサンダーバードにのった。つるがえきで、えきいんさんののりかえばしよにつれて行ってくれたから、ほくりくしんかんせんにちやんとのることができた。高おかえきにおじいちゃんがむかえにきてくれた。

「こうすけ、よく来たなあ。まっとうたよ。」

おじいちゃんはにっこりがおで言った。ぼくは、

「おじいちゃん、ひさしぶり。おみやげに、たこやきもってきたでえ。」

と言った。

と山に来て五日がたった。おじいちゃんとはたけでやさいをとつてバーベキューをしたり、おばあちゃんと金ざわ大わのハワイフェアでココナッツアイスを食べたりしていっばいあそんだ。六日目、おじいちゃんもおばあちゃんもいそがしくて、あそぶあいてがいなかった。だから、ぼくはいえの近くをさんぽすることにした。近くは田んぼだらけで、家がぼつんぼつんとあった。少しあるくと「ロンウッド」というこうじょうがあった。なんのこうじょうかと思つて見ていたら、犬のさんぽをしているおじいさんが、

「ここはやきゅうのバットのこうじょうやちゃ。」

と教えてくれた。なんと、タイガースのうえ田せん手や木なみせん手、さらに中のせん手のバットまで作つてしていると聞いて、とつてもびつくりして、目がとび出そうになったから、あわてておさえた。

もう少しあるいていくと、川があった。その名前は『だまし川』。

「だまし川なんて、だまされるのかなあ、うそだろう。」

ぼくの頭の中はハテナだらけになった。川をのぞくと、ブクブクあわが出ているところがあることに気がついた。ぼくは、近くで見ようと思つて川をのぞくと、足がすべつておつこちた。

「うわっ、おもっ。」

川の中から、男の子の声がした。びつくりしてぼくはとびはねてしまった。そして声のするほうを見ると、そこにはみどり色で頭にさら、せ中にこうらのある男の子がいた。

「お前はだれだ。」

男の子がきいてきた。

「ぼくは中村こうすけ。大きかから来たんや。きみの名前は？」

「おれはカップのカースケだ。この川にすんどるんや。」

「あのゆうめいなでんせつのカッパなん？すつげえ。」

ぼくはおどろきすぎて、目がでかくなってこけそうになるぐらいびつくりした。すごいと言われて、カースケはうれしいうれしい気もちになった。「今日、川の中でカッパまつりがあるんやけど、いっしょに来んけ？」とカースケがさそってくれた。

「うん、行く。」

ぼくはまよわずこたえた。ぼくは心の中で、「今日たまたまじんべえをきていてよかった。」と思った。

そうしてぼくとカースケは川にとびこんだ。

カースケが、

「カッパの村までおよぐスピードしようぶをしないか。」

と聞いてきたから、ぼくたちはぜん力でおよいだら、どうじに村にいった。

「おー、こうすけ、おれと同じはやきでおよぐなんてすげえなあ。」

とカースケはほめてくれた。カッパと同じはやきだなんて、しょうらいオリンピックをめざせるかもしれないと思った。

カッパの村ではちようどおまつりがはじまった。ぼくたちは、しゃてきと金魚すくいとくじ引きをした。とつても楽しかったけど、つかれたから、りんごあめをかって、じんじやのかいだんにすわった。そこで、ぼくたちは自分のことについて話した。まずはカースケが言った。

「おれのたんじよう日は八月八日。すきな食べものはきゅうり。おもしろいことがだいすきなんや。」

まさかの、ぼくと同じたんじよう日。たこやきの日だ。ぼくは、びつくりして心がはじけながら言った。

「ぼくのたんじよう日も八月八日なんやんかあ!!すきな食べものはたこやき。おわらいが大すきやねん。なんか、ぼくたちっておんなじよ

うな人生やんなあ？」

「ほんまやなあ、たんじよう日も、およぐはやきも、すきなものもおんなじなんてすごいな。」  
二人でたくさん話をした。

それからステージを見に行った。そこでは大食いせんしゅけんをしていた。ぼくたちはおなががすいていたから、出ることにした。ぼくは、きゅうりどんを十人前食べた。だからゆうしようできると思ったけど、カースケも十人前食べたから同点になった。そして二人ではらをこわしたから、いっしょにトイレにいった。

トイレから出ると、ちようど花火がうち上がった。

「うわあ、きれい。おとうとも見せてあげたかったな。」

カースケが言った。

「カースケにもおとうとがいるんやね。なんさいなん？」

ぼくがきくと、カースケはかなしそうなかおで言った。

「生きていたら五さいなんやけどね、きよ年こうつうじこでしんでしまったんだ。こうすけにもおとうとがおるんけ？」

「うん、ぼくのおとうとも五さいやで。でも、あんまりなか良くできてるへんねん。」

「そうなんや、なんでなか良くないん？」

「おとうとが、いきなりオケツをたいてきたり、かんちようしたりしてちよっかいをかけてくるから、イヤなんよなあ。だからいつもけんかになるんや。」

「そうなんやね。ぼくもおとうととよくけんかをしていたんや。おとうとなんておらんくなればいいと思ったこともなんでもあった。でも、ある日、本当におらんくなってしまうたんや。」

カースケはなみだが出そうになるのをめつちやがんばつてがまんしている。ぼくはたけしがきらいだけど、たけしがとつぜんいなくなっ

たらずごくかなしいと思った。おかしのとおりあいや、どっちがさきにするかのジャンケン、いつものおいかけっかがなくなるなんて考えたことがなかった。ぼくは、しずかに考えていた。カースケがどんなにかなしいか。しばらくしてぼくは言った。

「またカツパの村に来ていいかな？」

「うん、いつでも来ていいよ。」

カースケはにこにこえがおでこたえた。

ぼくたちは、ぼくたちがであつたばしょにもどつてきた。

「バイバイ、またね。」

カースケは、えがおで言った。ぼくも

「バイバイ、またなあ。」

と言って、はしつた。はしりながら、なんどもカースケのほうを見て手をふつた。もうカースケがみえなくなるギリギリのところ、カースケが大きな声で言った。

「バイバイ。」

それから二日たつて、ぼくは大きかにかえつてきた。大きかえきには、お母さんとたけしがむかえに来ていた。おとうとはニッコリして、「おにいちゃん、だいすき。」と、はしつてぼくのところまで来た。

かえりの車の中、ぼくはとなりでねているおとうとの頭をよしよししながら「今日からおとうととなかよくすること」「おとうとにやさしくすること」「おとうとといっしょにカースケに会いに行くこと」を心にきめた。

